

田中重太郎氏著

## 「清少納言枕冊子研究」

楠 道 隆

このたび笠間書院から刊行されたこの書は、「枕冊子研究」(昭和二十七年刊)、「枕冊子本文の研究」(昭和三十五年刊)につづく第三論文集であるが、続編であると同時に、補遺編にもなっている。まったく未発表の初期のもの、およびすでに単行本に収められてはいるが、すでに絶版になって久しく、容易に入手できなくなっている「清少納言」(昭和二十三年刊)所収のものをも載せてあるの、前記二著作とあわせて、氏の枕草子論文全集をなして、氏の研究および研究史を知るためにはきわめて重要な文献である。

この書の内容はⅠ作者論Ⅱ解釈・語法論Ⅲ語彙ノートⅣ研究史・影響史Ⅴ翻刻からなり、氏の研究・学殖の広さが一目でわかるようになっていて、この書はまさに枕草子学百貨店とも言える内容をもっていると言えよう。

ところで、氏はこの書の「枕冊子語彙考証」の項で「枕冊子の語彙語法を調査することは、私の生涯のかりごととしてゐることである」(255頁)とのべておられる。この表現は「枕冊子の伝流と諸本と」の項(295頁)でものべておられ、また「語彙考証」の中の「一曰ばかりの精進の懈怠」の項(239頁)でも「私自身も生涯この小さな問題(「けたい」か「けさい」かについて)を忘れないで考へつづけるつもりであるが」とのべておられ、氏が生涯をかけての研究の目標を「枕冊子を中心とする平安朝文学の語彙・語法の調査研究」(295頁)にあることを強調しておられる。たしかにこの本の主流もⅡ解釈・語法論とⅢ語彙ノートにあるとみられ「をり」の待遇法、「寝起く」考、「ふり」と「うり」、「ようたての森・よこたての森」など、さきの「枕冊子本文の研究」の大著にみられるのと

同じく精緻な調査研究がなされ、敬服させられるが、わたし(多分「わたしたち」になろう)から拝見すれば、氏にとつての枕草子はたんに平安朝文学の語彙語法の研究の中心というようなものではないはずである。氏にとつて、枕草子は研究の、いな氏の生涯のすべてであるときえ言つてさしつかえないと言えよう。でなければあの「校本」や「総索引」のような大事業ができるはずはないのである。「校本萬葉集」や「源氏物語大成」が多くの研究者による共同事業であつたのに比べて、「校本枕冊子」は多くの協力者はあつたにしろ、田中重太郎氏個人の生命の表現とわたしは観察している。この書についてもさきき枕草子学百貨店と評したように、枕草子に関するそれこそ「何でもある」のである。正統的な「人物論」「文体論」「文法論」「語彙論」「研究史」以外に「無名草子に見えたる清少納言と枕冊子」「枕草子の影響文献としての尤のさうし・絵本朝日山・吉原大鑑」、「本居宣長著思ひ草に見える枕冊子の影響について」から「枕冊子と古川柳」にまで及んでいるのである。これらは決して単なる国語学者の研究内容であるはずはない。百科全書家の仕事である。「右京大夫集に枕をたづねて」にはたすねてみたが関係はなかつたという報告がある。これらを見て感ずることはもう枕草子マニアの仕事と言えよう。清少納言と枕草子に関するものならそのすべてを研究しつくそう、その資料という資料の一切をあつめようとするマニアの仕事である。恐ろしいまでの執念である。だからこそ、加納諸平自筆「枕冊子木はの条」「忍鎧書画」田中大秀自筆「枕冊子目録」が著者架蔵として巻頭に写真で示されるにいたつたわけである。

なお、珍しい資料の翻刻もこの本の大きな特徴の一つとなっている。氏はこの本で長沢伴雄の「参考枕草紙巻一」(331頁-373頁)「雑纂訳解」(394-408)田中大秀の「枕冊子目録春曙抄第一」(565-586)「枕草紙の詞」(591-639)の翻刻を載せておられる。氏が研究資料を秘蔵されずにひろく研究者に公開して下さつてゐることについては、わたしたちはかねがね感謝してきていたことであつたが、このたびもまたこれら資料をこの本によって公開して下さつたわけである。金を惜しみ、てまを惜しむすぎている自分をまことに恥ずかしく思うと同時に、氏のこの宏量にただただ感謝するばかりである。

さいごにまことに残念なことに、この本にはこの種の本には珍しい錯簡があ

る。「絵と枕冊子絵巻と清少納言絵詞と」の中で476ページのつぎの477ページと478ページの一枚はそれにつづく479ページと480ページの一枚と入れかわらなければ文意が通じないのである。読めばすぐ気がつく誤りではあるが、こうした権威ある書だけに惜しまれる。

――神戸大学教授――

（笠間書院 昭和四十六年九月三十日発行 定価 六、〇〇〇円）